

No. 1

2019年 3月15日

JA中野市営農センター

『苗半作』と苗の良否が作柄に大きく影響します。基本技術の励行、細かな管理を行い、健苗の育成に努めましょう。

また、播種・田植えの早期化（特に南部地区）、気象の温暖化等により近年胴割米の発生が多く見られますので、播種及び田植え時期を適期に行い良質米生産に努めましょう。（中野市の播種目標 4 月 20 日～、田植目標 5 月 20 日～6 月 10 日、但し「風さやか」は 5 月 20 日～30 日）

1. 種籽の準備

※有利販売する上で**毎年の種子更新が重要**となっています。（種子銘柄証明のためにも採種圃産種子を使用して下さい。）

『JA長野県安心基準米』として出荷するためにも種子更新、種子証明のある苗を使用することが必要となります。

(1) 選種：自家産種子は、純度が低く充実が悪く発芽力が劣り、苗が生育不良になるため、採種圃産種子を使用して下さい。さらに充実した種子を揃えるため塩水選を行い塩水選後は良く水洗いをして下さい。

〈塩水選比重〉 うるち 1.13 (水18ℓに対し塩3.6kg)

もち 1.08 (水18^{リットル}に対し塩2.3kg)

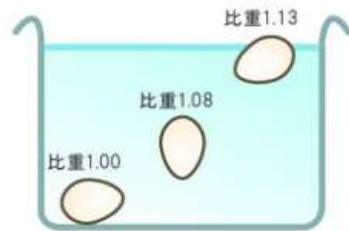


図1) 生卵による比重判断

(2) 種子消毒 「残液は魚毒性が強いので直接河川や用水等に絶対流さない」

対象病害	薬剤名(使用回数)	濃 度	浸漬時間	水量 100 ㎡当り薬剤量
ばか苗病 もみ枯れ細菌病	一般の場合は、テクリードCフロアブル(1回)	2 0 0 倍	2 4 時間	5 0 0 ml

※耐性を持ったばか苗病菌対策として種子消毒にはテクリードCフロアブルを使用する。

※みのる式の場合、根上がり为了避免のためスポルタックスナーナ SE を使用してもよい。

※もみ枯れ細菌病の発生が心配される場合は、カスミン液剤を播種時覆土前に4倍に希釈し1箱当たり50mlを均一に散布する。

注意事項

1. 種籾 1 kg に対し薬液 1.7～2 0 で処理する。
2. 浸漬中は、時々攪拌し液温(水温) 1 0 ℃以上とする。消毒後は水洗いせず陰干しし、乾かしてから浸種する。
3. 薬液は、通常 3 回位繰り返し使用できますので経費節減可能ですが、その場合不足した薬液は必ず補充して下さい。
4. 価格(税込み)

テクリードCフロアブル	7 3 4 円／1 0 0 ml
(スポルタックスターナSE 1,	2 9 0 円／1 0 0 ml)

(3) 浸種 「水温は5～15℃」

発芽を早め、揃いを良くするために行うもので、浸漬積算温度は100℃を目標に浸漬水温10℃で10日間程度十分に行う。

浸種の水量は種子の2倍以上とし、種子の位置は時々上下の入れ替えを行う。 浸種期間中は3日目から1～2日ごとに新しい水に変えること。また、池を利用する場合は停滞水で行うこと。

標準以上の高温管理は、ばか苗病の発生を助長するので避ける。

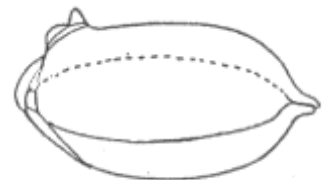
鳩胸状態（芽長 1 mm）

(4) 催芽 「32℃以上で病害リスク急激に増大」

浸種後、28℃のぬるま湯に一昼夜程度浸漬して、芽長1³/₄ (鳩胸)程度に催芽させる。

一昼夜で催芽が揃わない時は、新しい湯に取り換えて催芽が揃うまで浸種期間を長くする。

標準以上の高温管理で、もみ枯れ細菌病の発生リスクが増大するので避ける。



播種に最適な催芽(ハト胸)

2. 凍害対策

次の事項を守ってください。

- (1) 苗代の畦は高くし、深水に湛水できるようにしておく。
- (2) 防風施設・温水田を必ず設け、常時満水にしておく。また、降霜の恐れのある時は苗代へ湛水する。
- (3) こも等の保温資材をかけて床内温度の低下を防ぐ。
- (4) 保温資材（着色有孔ポリ及びパオパオ）をはずした後の苗代では、寒い夜は夕方から深水に少しずつかけ流しておく。
また、苗代及び温水田の畦畔からの漏水に注意する。
- (5) 折衷方式のビニールトンネルでは、夕方から箱上湛水をして保温につとめ翌日排水する。

もし凍霜害の被害を受けた場合は

- (1) 葉先が枯れた程度の場合は、日中浅水、夜間は深水にして回復をはかる。
- (2) 被害程度がひどくても生長点が凍害を受けていない場合には、苗箱1箱当り硫安5 g程度の追肥をし、生育の促進を図る。